

## 類纂本絵図註書帳の分類と典拠の推定

田 籠 博

### ○ はじめに

盛永俊太郎・安田健編『享保元文諸国産物帳集成』（以下『集成』と略）第十六巻に「富山前田本草」と「陸奥国産色絵図」が収められている。両書とも形状、生態にかんする注記をともなった動植物の彩色絵図帳である。編者である安田健氏の指摘によれば、両書は江戸時代の享保元文年間に作成された複数の産物絵図註書帳から転写されたものを内容とする。

「富山前田本草」はその相当部分が筑前福岡領、備前備中岡山領、肥後豊後熊本領、伊豆国の絵図註書帳から写され、「陸奥国産色絵図」も伊賀国、隠岐松江領のものを写している。互いに比較すると、絵図はもとより註書の細かな部分まで忠実に模写されていることが判明する。

だとすれば、残る絵図註書もいずれかの国領の絵図註書帳から引かれたものと推定することが許される。まだ存在が知られていない国々の絵図註書帳がふくまれているとすれば、たとえ一部とはいえ貴重な資料となるであろう。

### 一 「富山前田本草」と既知の絵図註書帳について

越中国富山領の第十代前田利保は、江戸において博物同好会の楮鞭会を主宰し、『本草通串』『本草通串証図』を刊行するなど博物学趣味の大名として知られる。<sup>〔注1〕</sup>「富山前田本草」（富山県立図書館蔵）がそうした著述の参考資料の一つであったことは巻頭にある識語が伝えている。

富山前田十代龍沢公／本草通串御編纂之際肥後国／二十一細川家ヨリ為参考／送本之内ナリ

十九世 杉本有貞

ただ、杉本氏のいう「送本之内」が、本書中の熊本領関係の絵図註書のことなのか、

右之通御座候以上／元文二年八月／細川越中守内 沢村孫大夫(332)

※引用末の数字は所載頁数

という熊本領から江戸へ提出したときの識語がある巻四までなのか、あるいは本書全体を意味するのか明らかではない。いずれにせよ、享保元文年間に作成された絵図註書帳が、約百年後にあっても各国各領に残されていて重要な資料と見なされていたことを示している。

本書は八巻八冊からなり、巻一〜四が草之部、巻五〜六が木之部、巻七〜八が魚之部である（ただし、分類は厳密には行われていない）。所収絵図は計二百九十三種、右の分類ではそれぞれ百六十二種、六十三種、六十八種で、主として植物類と魚類で占められている。

『集成』は原本で同一面に絵図と註書が載るものを分けたり、一面に複数の絵図註書が存する場合それぞれを独立させているから注意を要する。巻三を中心に一面に二種の併載が七例、三種併載が二例あり、実際の絵図の総数は二百八十二図になる。以下では必要のない限り『集成』にならって何種と呼ぶことにする。

前述のように、本書中に現存の産物絵図註書帳と比較できるものがある。既に指摘されているのは、筑前福岡領<sup>注3</sup>、備前備中岡山領、肥後豊後熊本領、伊豆国についてである。

福岡領と岡山領から写したものは註書に片仮名を用いる点で共通し、平仮名を使用する他とは明瞭に区別できる。

福岡領からは草類十五種、岡山領からは木類（果類一種をふくむ）十六種である。

熊本領の絵図註書帳は今日知られていないが、熊本大学附属図書館永青文庫に「産物註書」二本が残っており、これが肥後、豊後両国の註書の控えと認められる。一本（登録番号14・20・5）は添削の跡を残す案文、いま一本（登録番号14・20・6）はその清書本で、<sup>注4</sup>後者が『集成』第八巻に収められている。それによると、肥後国分が草類二十種<sup>注5</sup>、

豊後国分も草類四種が引かれている。

伊豆国は草類四種、木類一種、魚類五種で、計十種が「伊豆国産物絵図帳」と重なる。

右の通り、筑前福岡領から十五種、備前備中岡山領から十六種、肥後豊後熊本領から二十四種、伊豆国から十種で合計六十五種が完全に一致する。熊本領を別として、絵図はもちろん註書の内容、表記、筆遣い（書風）までもが原本のままであるから、残る二百二十八種の絵図註書もまたいずれかの絵図註書帳の内容を忠実に伝えていることが期待される。

## 二 「富山前田本章」絵図註書の分類

典拠不明の二百二十八種の絵図註書を通覧すると、それぞれの註書の記載形式や用語、表現などがいくつかのグループに分かれることに気づく。

大きく絵図註書における産物名の記載形式で分かれ、両見出し形式の甲類と、片見出し形式の乙類とがある。甲類は絵図と註書とにそれぞれ産物名を掲げ、乙類は絵図のみに産物名を記して註書にはない。既知の絵図註書帳を調べると、次のようにきれいに二分される。

甲類 武蔵川越領、武蔵多摩領、近江彦根領、出雲松江領、広島領（安芸、備後）、萩領（長門、周防）

鹿児島領（薩摩、大隅、日向諸県）

乙類 南部盛岡領、佐渡国、伊豆国、遠江懸河領、名古屋領（尾張、美濃、信濃）、伊賀国

近江国不明領、和泉岸和田領、和泉関宿領、和歌山領（紀伊、伊勢）、岡山領（備前、備中）

備前松山領、隠岐松江領、筑前福岡領、肥後米良山領

元来、絵図註書帳は一紙の右に絵図、左に註書を認め、二つ折りにして冊子に仕立てる。つまり絵図と註書とが表裏に分かれのである。註書の方にも産物名を記すことで、見開きの左面にある絵図とは別であることを示そうとしたのが甲類の形式である。乙類に属するものでも、例えば伊勢和歌山領が絵図に見出し「百もく草」を立てながら、註

書を「右百もく草、白子領須川組之内、藪に出生仕候」と冒頭に産物名を記すのは、こうした絵図註書帳特有の事情による誤認を避けるための工夫と思われる。

右に分類した絵図註書帳には転写本もあるから、乙類の中には転写のさいに表裏の絵図と註書とを一面に集め、重出する産物名の一方を省いたものがあるかも知れず、その原本が事実この通りであったかどうかまでは分からない。しかし、見出しの記載形式に甲乙両類があったことは確実で、よってこれを大分類とする。

## 二一 甲類の細分類

両見出し形式の甲類を註書の記載形式、用語、表現などの諸特徴によって細分し、グループ化を試みる。A群以外には形式上の明瞭な特徴がないから、他は註書の用語、表現などを基準とする分類となる。(準)

【甲類A群】 甲類の中に絵図見出しの右肩に「草類之内」「魚類之内」などと「類之内」が肩書きされているものがある。これらを甲類A群とする。全部で二十種あり、内訳は海草類、草類、木類、虫類、獣類が各一種、魚類が十種、魚類の低位分類「いるかの内」が三種である。

このA群の註書の冒頭には必ず「是は」が冠される。

やうけなし 是は二月頃より葉芽立、四月ころはな咲申候。花はうつぎのことく、実は栗の様に御座候。花葉共にかてなどにいたし、食し申候。(335)

このように、所属類の肩書きをもつA群は、同時に「是は」で始まる註書を有し、互いに出入りがない。

【甲類B群】 A群と同様に、註書を「此」で始めるものが九種ある。これを甲類B群とする。例えば、魚類(サヨリ)の註書は次の通りである。

さいれ 此魚、大サ七八寸、春の頃多々、常も少づ、は有之候。(475)

九種中八種が魚類、一種が海草類であるから、海産物に特徴のあった絵図註書帳からの写しであろうか。既知のものでは、安芸備後国広島領のもの（芸藩土産図）に註書を「此」で始める例が多い。

つくせうし 此虫、山中又は郷中森木、七月頃より九月頃迄居申。形チせみニ似寄申候。

しくち 此魚、長壹尺貳寸三寸より尺位迄之魚ニテ、惣躰ほらのことくニ御座候。

用語、表記を仔細に見ると、「此魚」七種に対して「此うを」が一種、「いろ形図のことく」「色形図のことし」「形如図」に対して「いろ形図の通り」一種があつたりする。「候」を用いない註書が二種（内一種は「図の通り」と同じ）あるなど、厳密に統一されているわけではない。

### 【甲類C群】

魚類に限られるが、註書を「海魚にて」「海魚ニテ」で始める十一種である。

黒ほご

海魚にて、冬春は希ニ有之、大サ三四寸、いろ形図のことし。(467)

右のように、「いろ形(かたち)図のことし」「いろ形如図」を必ずふくむという特徴を共有する。原則として「候」を用いないが、「相見ハ不申候」の時は例外(二種)となる。

このC群は、A、B群とは無関係であるうが、後のE群以下と共存しえないわけではない。書風からいえば、G群、H群に類似する点が多い。

### 【甲類D群】

註書末尾を必ず「形絵図のことし」で結ぶ十五種をD群とする。記載内容によってさらに分けることもできる。

一類は「四月、五月、不断」と時期を明確に記し、「はへ(生へ)、芽を出し」などという用語を用いる。例えば、草類(ツユクサ)を写した註書には、

かまつか 四月頃に芽を出し、六七月頃に花咲、色空いろ、形絵図のことし(27)

とある。もう一類は、原則として産物の大きさから註書を始める。例えば、

ま、かり 長三四寸位、横七八分位、八月九月頃取申候、形絵図のことし(511)

のごとくである。前者は草類、後者は木類、魚類が該当するから、註書作成者の違いに原因するのもかも知れず、直ちに別の産物帳ということにはならない。

何よりもD群において特徴的なのは、「絵図のことし」の「絵図」という用語である。一般に、註書で絵図参照を指示するとき、それを「図」と呼ぶか「絵図」と呼ぶか明確に使い分けられ、混用されることはない。

「図」使用

南部盛岡領、武蔵川越領、武蔵多摩領、佐渡国、伊豆国、名古屋領(尾張、美濃、信濃)

和泉関宿領 備中松山領、広島領(安芸、備後)、出雲松江領、萩領(周防、長門)

熊本領(肥後、豊後)、肥後米良山領

「絵図」使用

遠江懸河領、近江彦根領、近江不明領、伊賀国、和歌山領(紀伊)

この種の表現をもたない註書もあるから、すべてを二分できるわけではないが、使い分けの存在は明らかである。D群としてまとめおく所以である。

【甲類E群】

以上のA、D群ほど明らかな特徴とはいえないが、註書中の「かたち図のことし」を典型とする用語、表記をふくむ十一種をE群とする。

このみの木  
なめらふく

深山に有之。春葉生し、秋実なり申候。かたち大<sup>サ</sup>図のことし。ぶなの木とも申候。(387)

後者のように「候」を用いないものや、「かたち」をふくまない註書もあるが、書風の類似などによって仮に所属させる。内訳は菌類四種、草類、木類各一種、魚類五種である。

【甲類F群】

E群と同じく「形<sup>ナ</sup>図のことく」を典型とするやや長文で独特の書風のもの七種をF群とする。内訳は草類四種、魚類三種である。

いだ 形<sub>テ</sub>図のことく、細長<sub>ク</sub>、鱗残魚のことし。大小有り。大は一尺五六寸程有り。細鱗、背通り青黒<sub>ク</sub>、腹白。

四季共<sub>ニ</sub>居申候。(595)

「図のことく」は用いられないが、用語、書風がこれと同じ魚類三種をこれに加える。

つばくら魚 形<sub>テ</sub>ほらに似り。背通りの色青、腹白<sub>シ</sub>。ひれ長く、大<sub>サ</sub>耆尺<sub>ニ</sub>三寸迄御座候。数捕<sub>レ</sub>不申候。(469)

きじやめ 形<sub>テ</sub>細長<sub>ク</sub>、大<sub>サ</sub>耆尺位迄有之。背通り蠟色に、少黒<sub>ク</sub>か、り、腹蠟色、ひれ蠟色にて、赤き星有り。

尾同前。口細。(525)

なわくり 惣躰さめはだにて、鼠色にくろみか、り、大は三尺程迄有之。口はしきき<sub>ハ</sub>二寸余も有之候。冬春

の間捕<sub>レ</sub>申候。(539)

二例の「形<sub>テ</sub>」が共通するほか、「数捕<sub>レ</sub>不申候」「冬春の間捕<sub>レ</sub>申候」はF群「か、み魚」と「ひら」に同じ表現があり、他群に例を見ない。

さらに、書風はやや異なっているように見えるが、表現が共通する草類二種を加える。

ほぜのね 二月頃より生、根葉ともに水仙に似て、葉長<sub>サ</sub>五六寸程、色青黒<sub>ク</sub>、花は付不申候。(33)

田烏子 三四月頃より葉生し、七月頃根の古玉落、新敷玉付申候。水溜りに作り申候。おもたかに似、葉広く、

花咲不申、秋末枯申候。長一尺四五寸。(57)

F群の「かつね」「むまこやし」に「二月頃より生」とある。「二月頃」「三四月頃」の代わりに「春」でよさそうだが、例えば熊本領の註書が「二月之頃」「三四月之頃」「春之頃」とするのに似ている。従って、F群は計十二種になる。

【甲類G群】

E群、F群と同じく「図のことく(し)」「如図」をふくむが、註書の冒頭を「春、夏、六月」という季節記事で始め(例外が一種)、生育場所、大きさ、夏の開花状況、秋の生態の順に記事を続けるのが典型で、長さは一〜三行(一種が一行)のもの二十種をG群とする。書風は概して流麗で整っている。内訳は草類十九種と木類一

種である。

ひうじ 春野<sub>ニ</sub>生し、夏図のこつく生立。大<sub>サ</sub>壹尺余、花実無之、秋枯申候。(87)

谷女郎 春葉を出し、大<sub>サ</sub>二三尺。夏図のこつく花咲、秋落葉仕候。(111)

さんほうで 大<sub>サ</sub>壹尺斗、色形図のことし。(169)

最後の絵図は(サポテン)らしく、季節記事がないのも当然か。この群のものには「候」が用いらるが、註書の末尾に一例あるのが普通で、A群やE群、F群のように数箇所を使用されることはない。

【甲類H群】 G群と極めて類似した書風、記事内容で、「図のこつく」をふくまない点だけが異なる六種をH群とする。

かちもんじ 春野<sub>ニ</sub>生し、大<sub>サ</sub>壹式尺。夏の末黄色の細<sub>キ</sub>花咲、秋実なり、実<sub>ニ</sub>はり有之。冬<sub>ニ</sub>至り枯申候。(17)

内訳は草類六種、木類一種である。右の例からも分かるように、G群にまとめてしまってもよいと思われるが、しばらく別群としておく。

【甲類I群】 甲類の最後に残った七種をI群とする。内訳は草類、蔓類各一種、木類五種である。偶然の結果だが、互いに書風が類似するよう見え、用語にも共通するところがある。

ふのり葛 四季共<sub>ニ</sub>葉有之、花実無之。ねばかつら共申候。(23)

註書の最後に異名を記す例は別にもある。

とり木 山に有之。小木にて御座候。六七寸廻り、春葉生し、花実無之。黒もじとも申候。(343)

右二例の「有之、無之」は他三種にも用いられている。例えば、

みやまつ 山に有之。葡萄のことく蔓にて、木にはい付申候。三月頃葉生し、夏実なり、秋の末熟し、黒く成

申候。大<sub>サ</sub>大豆程。(267)



「申候」あるいは「御座候」を用いる一方で、

道いんど 道通り、芝の中に春生し、花実なし。長一尺四五寸。(319)

などがあるのは、推敲が不十分であったためか。「図のこたく」はふくまないが、全体の印象からはE群に類似している。

以上、両見出し形式の甲類を各種の特徴によってA-Iの九群に分類した。既述のように、種々の点から見てC群、G群とH群は同一の産物帳にもとづくかと思われるが、今は慎重を期しておきたい。

## 二二 乙類の細分類

片見出し形式の乙類の註書は甲類に較べれば分類のための手がかりが多い。

### 【乙類a群】

独特の書風で、概して長文のものが三十一種ある。これを乙類a群とする。

馬こやし

野圃家園にも生ず、三月頃生立、始はたんほ、の葉に似て葉薄く、色淡青にしてやはらかなり、缺

刻多く、葉中の筋淡紫色なり、生立あざみの如にして、根付の茎も淡紫色なり、高さ二尺斗、花形野菊のいまだ開ざる如にして、色黄なり、後、白毛と成て風に飛。(120)

右のように、「候」「申候」を用いず、「野圃、家園」など独特の用語を使用する。魚類(セイラ)の註書には、

くまびき

海魚にして、夏秋取れり、大成は二尺四五寸まで、少細鱗有り、頭上高く、尾の方細く、背淡青色、

其内に深青の星有り、腹の方淡黄色なり、尾鱗、一鉢の形状図のことし。(514)

と「一鉢の形状図のことし」なる特有の表現がみえる。なお、魚類の註書が「海魚なり」「海魚にして」「磯魚にて」で始まる点は甲類C群と類似する。

【乙類 b 群】 これに属するのは、魚類のわずか二種にすぎない。それぞれ二種の註書が併記されているのが特徴である。

石がندوق 形こち<sup>ニ</sup>似て、黒茶色、大小あり。

甲和らかに、爪<sup>ニ</sup>毛あり、泥色、黒き星有。(502)

わたこ 形あゆ<sup>ニ</sup>似て、細く、色少し黒し。

形こち<sup>ニ</sup>似て、黒茶色、大小あり。(520)

いずれも二番目の註書は掲げられた絵図とは無関係と認められる。「石がندوق」の註書と同文が見えるのは、どういう意味なのか不明である。

【乙類 c 群】 絵図の見出しが原則として中央に位置し、註書の一行が極めて短く、簡略で（典型は「春生」「九月末生」、書風もやや雑な四十種を c 群とする。原本で一面に複数の産物を記載するのはこの群に限られる。絵図としては二十九図である。

内訳は穀類（すべて大豆類）九種、菜類二種、瓜類一種、草類十六種、木類五種、菌類五種、および川魚と思われる魚類が二種である。本書中の穀類（大豆各種）、菜類、瓜類はこの群のものだけである。註書の内容は概して簡略だが、

ぬけ大こん 春土用中種まき、九十月頃摘申候。(14)

ぶどう大豆 五月廿日頃種まき、七月中花咲、八月中実なる、味常之大豆同断。(48)

右のように穀類、菜類では播種や収穫時期を細かく記し、食味に言及するという特色がある。

【乙類 d 群】 乙類の残り四十三種を d 群とする。積極的に同群を主張するほどの特徴はないが、註書の書風（線の細い端正な筆跡）、用語などが類似する。内訳は草類十五種、（海）藻類四種、蔓類二種、木類二十一種、魚類一種で

ある。消極的ながら一群のものと考えらることにする。

以上、「富山前田本草」における典拠不明の絵図註書の細分類を試みた結果が表1である。なお、絵図ごとに通し番号をつけ、表中に示した種別は筆者の認定による。

### 三 『陸奥国産色絵図』絵図註書の分類

『陸奥国産絵図』（二巻二冊、東洋文庫蔵）については成立事情がまったく不明で、陸奥国の名が付けられた由来なども分からない。原本は未見だからすべて『集成』による。

所収の百二十四種の絵図註書のうち、二十種が「伊賀国産物図」から、二十五種が「隠岐国産物絵図註書」から転写されていることが既に指摘されている。残る七十九種の絵図註書を「富山前田本草」と同様の観点から分類する。

本書には本稿でいう甲類形式の絵図註書はふくまれず、乙類形式のものと、一面の上下に註書、絵図を配するものとに大別され、後者がさらに細かく分かれる。

【A群】 乙類形式のものをA群とする。二十種の内訳は草類二種、虫類十六種、魚類、貝類各一種である。魚貝類を除き、すべて上巻にまとまっている。

ひいる 夏泥川に生ず。水上に浮ひ、人の手足へ付、血を吸ふ。形図のことし。ひいるは片言にして、実は蛭と唱。(667)

一説本草綱目云所水蛭。

右のように「候」などを一切用いない。「一説」として漢名を掲げるのは、例えば鹿児島領のものに似ている。

あらほ 荃葉粟のことし。高<sub>サ</sub>二三尺、四月比苗を生し、秋の比穂を出し、粟に似たり。白畠地に多し。

本草綱目所載之狗尾草歟

(大隅国)

【B群】 一面の上部に註書、下部に絵図を載せるもので、註書冒頭に見出しの産物名を再掲し、次に季節記事を有するものをB群とする。既掲の伊勢和歌山領のものに似ているが、註書本文に取り込まれる形式ではなく、独立している。もともと甲類形式であったことの名残りかと思われる。

べいこ虫 へいこむし。夏中有之。大<sup>ナ</sup>如絵図。形きりくすに似申候。音無御座候。(682)

海たなこ 海たなこ。春より夏中有之。大<sup>ナ</sup>五寸位。石もち<sup>ニ</sup>似て、色絵図之通り御座候。(758)

右のように、「絵図」の語を用い、「御座候」を使用する註書も多い。すべて下巻に存し、内訳は虫類六種、鳥類七種、魚類十七種、貝類三種である。

【C群】 絵図註書の形式はB群と同じで、註書の最初に見出しの産物名を再掲する点も同じだが、季節記事は註書の最後に位置し、「形如斯」といった用語を用いるもの十種をC群とする。

どろむし どろむし。形如斯。栗むしに似申候。稲の葉に付有之。大<sup>ナ</sup>絵図之通り。夏。(685)

いそり貝 いそり貝。形如斯。貝の色、大<sup>ナ</sup>絵図之通り。磯岩に付あり。四季とも有り。(764)

「絵図」を用いる点もC群と同じだが、「御座候」は例を見ない。なお、右の諸特徴を有する次の註書もC群に加えてよいかと思う。

かうずむし 形如是。袖虫<sup>ニ</sup>似申候。足六本付、尾先<sup>ニ</sup>角巻本有。色絵図之通り。楮の木<sup>ニ</sup>付、秋中あり。(689)

ひらかむし 形如斯。ほうつき虫<sup>ニ</sup>似て、大<sup>ナ</sup>ぶり。色はかき色。頭少<sup>ク</sup>ひけ有。足六本付。絵図之通り。川<sup>ニ</sup>栖

申候。夏。(695)

「形如是」はやや問題だが、見出し産物名がないのは、不注意による誤写と考える。四種あり、すべて虫類である。従って、C群は計十四種となる。

【D群】 註書は季節記事から始まり、「絵図」「御座候」などを用いるもの八種をD群とする。

水シメナキ眼虫

夏中有之。大々色形如絵図。苗代、水上杯ト栖申候。唱コ多無之候。(688)

がわむし

夏中有之。色形絵圖之通り。川に栖み申候。音無之候。(692)

右をB群の註書例と比較すると、見出し産物名の再掲がない点を除けば、記事構成や用語が極めて類似している。C群における誤写例と同様に考えたい所だが、しばらく別に分類しておく。内訳は虫類七種、獸類一種である。

【E群】 以上のA、D群とはまったく異なる魚類の絵図註書が一種ある。

おきの手

小川に生す。大々寸四五分はかり。色薄白く、黒きかたあり。味ひどぢやうに似たり。一説、鷹

の羽どぢやうともいふ。(725)

【F群】 絵図だけのものがある。当面の検討からは除外されるが、便宜上F群としておく。貝類の三種である。

以上の基準で分類したものが表2である。表1と較べて内容が整備されているから、何らかの目的をもつて編集されたものであろう。

#### 四 典拠となつた絵図註書帳

これまでの絵図註書の分類は、近世中期方言語彙資料としての産物帳研究のためには予備的な作業である。重要なのは、それぞれの註書群が何国何領の産物帳に該当するかをその動植物名から明らかにすることである。しかし、結論からいえば、ここで採つた方法ではそれが決定できるものは一つもない。しかし、ある群についてはかなり狭い範囲で地域的な特性を指摘できる場合もある。

なお、現代方言資料から二百五十年も以前の地域性を見ることに疑問が生じるかも知れないが、経験的にいって、

ここで取り上げた動植物名方言に関する変化は意外に少なく、概ね認められるのではないかと考える。むしろ、昭和三十年代以降から今日までの変化の方が大きいかも知れない。

使用した文献は全国分布をみることを主としたために、小学館『日本方言大辞典』（『日方』）、渋沢敬三『日本魚名集覧』（『集覧』）、田中茂穂『実用魚介方言図説』、杉本つとむ『小野蘭山 本草綱目啓蒙』（『啓蒙』）、京大言語学国文学研究室『諸国方言物類称呼』などである。参看すべき文献は夥しいが、今はこれだけに限っておく（括弧内は以下で使用する略称）。

#### 四一 「富山前田本草」 典拠の地域性

【甲類A群】 この群の地域性を最もよく示すのがNo253「かゞみちよ」（カナヘビ）である。

かゞみちよ 是は色土色にして、うす赤、腹は白く青し、夏頃山道などに出申候、大<sup>サ</sup>とかげのことにて、

色かわりたるまでに御座候、大毒虫のよし申伝候。(545)

『日本語地図』第25図によると、〈カナヘビ〉をカガミチヨ、カガミツチヨというのは、東日本に限られ、長野県東部に8地点、神奈川県山梨県境に1地点、伊豆に2地点、千葉県最西部と栃木県に各1地点分布する。〈トカゲ〉の呼称としてなら使用地点が多いものの、分布するのは関東西南部から山梨県、長野県東部、伊豆半島一帯で同様である。A群には海草類「なりのり」や魚類のサメ、イルカ類がふくまれるから山梨や長野ではありえない。また、草類のNo136「がつほうじ」は伊豆国の絵図註書帳に恐らく同種の「がつほうし」が見出せる。

がつほうじ 是は二月ころよりめざし、葉色青く、大根などの葉に似申候、花は黄色にて、たんぼ、などのはなのことくに御座候、春やはらかなるときは、かてなどにもいたし給申候。(299)

がつほうし 葉の形図の如く、冬の内より芽を出し、来春黄色に花咲、菜の花のことにし。種付不申候。

魚名ではNo222「とうやく」（シイラ）が注意される。『集覧』によれば、紀州各地や大阪府堺を別にすれば神奈川県三崎でトオヤク（トウヤク）というらしい。No273「あかぎ」は同所で〈キンメダイ〉のことで、絵図はいささか異様

だが「風味宜ものにて、別て十月令冬中は味宜御座候」とある。もつとも、相模、伊豆周辺だとするとNo 257「あしか」が載っているのは驚きである。しかし、日本海側では長門萩領でも記録している。

### 【甲類B群】

No 99 「ゑびのす」は川藻の一種（キンギョモ）らしいが、小野蘭山は『本草綱目啓蒙』で紀州方言として（巻十五五才）。これは紀伊和歌山領の絵図註書帳の記事「ゑびのす 夏之内、水中ニ生。葉莖共葎ニ似テ、色薄青、花実なし」から採録したもので、彼の自筆稿本『伊呂波別動植物名彙』に「紀図上」と注記がある。魚類（サヨリ）は大小よって呼び分け、大をNo 220「さいれ」、小をNo 235「よどろ」といった。『集覧』によれば茨城県の土浦、霞ヶ浦、水戸にサイレンボオがあり、この三地点と広島県でヨドロともいうらしい。同じくNo 261「かたさし」は（カサザメ）に当たるようだが、『集覧』は広島県賀茂郡の呼称としている。No 219「ばいほご」（カサゴ）は見当たらないが、広島県ではホゴというらしい。和名でもあるNo 224「ひらまさ」やNo 281「くろはぎ」（ウマヅラハギ？）なども併せて考える必要がある。

### 【甲類C群】

魚類ばかり十一種だが、No 232「もふし」（カンダイ）は関西および広島県でその名がある。No 268「あまぎ」は高知県で（クロサギ）や（ダイミョウサギ）をいう。No 282「すぎざき」が（サカタザメ）に当たるとすれば高知県でスキサキ、関西一帯でスキノサキともいう。

### 【甲類D群】

No 12「かまつか」はF群のNo 131と同じく（ツユクサ）で、中国四国地方で広く用いられている。No 171「ぐいび」（ハルグミ）、No 197「かうかい」（ネムノキ）も同様である。魚類のNo 237「ま、かり」（サツパ）は岡山県が有名だが、瀬戸内一帯や山陰でも用いる。

### 【甲類E群】

No 115「かつぼ茸」に、

かつぼ草 池潟、かつぼ有之所に、八九月頃生し申候、図のことし、外の菌より茎細長く、四五寸も御座候、かつぼとは、まこもの儀にて御座候。(253)

とある。(マコモ)を意味する「かつぼ」は、『啓蒙』に越後のカツボが採録され(巻十五9ウ)、『日方』は山形県にガチボ、新潟県にガツボ、ガツボがあることを載せている。No133「山かぶ」(ウバユリ)は『日方』によれば越後、加賀、山形、伊勢の呼称である。魚類のNo256「車鯛」(マトウダイ)は、『集覧』その他によると新潟から北陸へかけて用いられる。No236「ほう長」は「大川に有之」とあるから川魚らしく、出羽米沢領の産物帳にある「類長」と同じかも知れない。

【甲類F群】 前に触れたようにNo131「かまつか」(ツユクサ)は中国四国地方に広く用いられる。No64「かつね」は絵図に「葛かつら」とある通り(クズ)をいうが、筑前福岡領の産物帳にも「くず 俚語に葉のひらきたるを、しづなといふ。根を、かづねといふ」と見え、『啓蒙』も筑前方言としている(巻十四上23ウ)。魚類のうちNo217「つばくら魚」(トビウオ)は『集覧』によれば長門の呼称で、ツバクロまたはツバクロウオが長門、豊後、播磨灘にある。No244「きじやめ」(キユウセン)は見当たらないが、ギザミの訛形とすれば関西から中国地方一帯のものである。No259「ひら」が註書に「鱗おちやすき魚にて、手なとあたり候へは、鱗おち申候」ということからイワシ科(ヒラ)に該当しそうだが、これも紀州以西の瀬戸内一帯の呼称のようである。No278「いだ」(ウグイ)もまた中国四国地方に広く行われている。

【甲類G群】 草類のNo41「ひうじ」が(カラムシ)だとすれば『啓蒙』が播州方言とし(巻十一34ウ)、『日方』は紀伊、徳島、岡山、香川、愛媛を載せる。No47「ゑのこぼう」(エノコログサ)は同じくエノコボが岡山、讃岐、香川、伊ヌコボが香川にある。

『啓蒙』にはNo55「ゑぶこ」(イヌエビ)が予州方言「エブコカツラ」(巻二十九5オ)、No80「さんほうで」(サボ



テンの一種」が予州方言「サンボテ」(巻十六15オ)、No 124「のひすま」(シユンギク)もまた予州方言「ノビスマ」(巻二十二16オ)として載っている。もつとも、常に『啓蒙』と一致するものでもなく、No 177「河原かしわ」(キササゲ)について『啓蒙』は勢州方言とし、(アカメガシワ)では予州「カハラガシ」、土州「カハラガシハ」としている。

【甲類H群】 No 7「かちもんじ」は周防萩領の産物帳にいう「河原柴胡<sup>サイ</sup>」の異名「カシモンジ」に似ている。No 163「くい」(ノイバラ)も西日本各地で用いられる。

【甲類I群】 No 10「ふのりかづら」は『啓蒙』が(南五味子)に日州、土州方言として掲げる「フノリカヅラ」(巻十四上3ウ)と同じか。No 157「とり木」は「黒もじとも申候」とあるように(クロモジ)だが、『啓蒙』は越後方言とし(巻三十二22オ)、『日方』は新潟県以北の東北各県に用いられていることを示している。

【乙類a群】 魚名に明らかな地域性が認められる。No 215「はつ」(マゲロ)、No 221「そぢ」(カンパチ)、No 239「くまびき」(シイラ)、No 240「きつ魚」(メジナ)、No 262「ばけら」(イボダイ)、No 269「くゑ」のすべてを満たすのは土佐をおいてない。慎重を期せば、伊予宇和島領あたりも可能性があらうか。

草類のNo 143「はたかり」(メヒシバ)も『日方』によると山口県大島、愛媛と並んで高知県幡多郡が見える。木類のNo 199「させぶ」は恐らく(アキグミ)のことで、『啓蒙』に讃州高松「コメシヤシヤブ」、同丸亀「シヤシヤブ」、阿州「シヤシヤビ」とある。No 203「どうねり」(タブノキ)、No 204「うつなの木」(クヌギ)なども四国地方で使用されている。

【乙類b群】 魚類二種では何ともいえないが、No 242「わたこ」が『集覧』でいう(ワタカ)の方言だとすれば、生息地が琵琶湖および淀川に限られるから、絵図註書帳のもまたそのあたりに求められる。

## 【乙類c群】

出羽米沢領、庄内領の産物帳に記載された産物名と共通するものが多い。順に示せば、No 5「雪の下大豆」は米沢の黒大豆類「雪ノ下」、No 6「ぬけ大こん」は庄内の蘿蔔「ぬけ大こん」、No 13「赤さい大豆」は庄内の大豆「赤さい」、No 23「ぶどう大豆」は米沢の大豆類「葡萄」、No 61「まりこ」は米沢の草類「車前草 又マルコ共」、No 68「ちもと」は庄内の草類「山蒜 ねひる 根をちもと、申候」、No 90「しどけ」は庄内の草類「しどけ」、同じくNo 90「青はと大豆」は米沢の青大豆類「青鳩」、No 112「柳もたし、かのかわ、ますたけ」は庄内の菌類「柳もたし、ますたけ、かのかわ」、No 113「むきたけ、わかいたけ」は庄内の菌類「わかい、むきたけ」といった具合である。

その他、草類のNo 17「へびす」には『啓蒙』の「半夏」の奥州方言「へビス」、仙台方言「へブス」（巻十三29ウ）が挙げられる。紙幅の関係で挙例を省くが、他も東北地方のものとして矛盾しない。

## 【乙類d群】

No 210「あさとり」（アキグミ）は、『啓蒙』が備前「アサドリ」（巻三十二12オ）を載せるように、中国地方東部に分布する。魚類のNo 245「えいらみ」は註書に「かすべえい共申、赤えい共申候」とあるから（ガンギエイ）らしく、カスベは新潟以南の日本海側での呼称である。

「富山前田本草」の典拠となった各群のうち、地域性がほぼ明らかなのは、【甲類A群】が相模周辺、【甲類E群】が越後周辺、【甲類G群】が四国（伊予か）、【乙類a群】が恐らく四国土佐、【乙類c群】が出羽南部といった所の絵図註書帳から写されたと考えられる。その他は漠然としているから今後とも調査の必要がある。

## 四一二 「陸奥国産色絵図」典拠の地域性

【A群】 No 1「とうくから」（イタドリ）は比較的分布地域が限られ、『全国方言辞典』は長野にトートンガラ、新潟にトトンガラを挙げている。東北地方のドンガラ系の語もこれに関係があるとすれば、さらに東日本一帯に広が

る。No 2 「きもと」は註書に「葉ほそく（中略）ひとつといふ物に似たり」というから（アサツキ）または（ワケギ）らしいが、いずれにしても『日方』では岩手、山形県の呼称という。No 18 「いなご」は（トノサマバッタ）らしい。No 21 「しをからむし」（アメンボ）は各地に分布するから何ともいえない。

【B群】 No 39 「べいこ虫」の図は（シヨウリヨウバッタ）と思われる、No 47 「はつたぎ」には（イナゴ）が描かれ「舟漕虫とも云」の注記がある。ハッタギは『物類称呼』以来、奥州仙台の方言として知られている。

魚類ではNo 94 「れんてん」、No 95 「かすべ」によく似たエイ類が描かれている。『集覧』によれば、（カンギエイ）を茨城でレンテ、常陸でレンテイエイ、宮城でレンテイエイという。「かすべ」は「富山前田本草」のNo 245 「ゑいらみ」に「かすべゑい共申」と注記があったが、日本海側での呼称である。また、（テングカスベ）を東北地方でカスベとすることを『集覧』は記している。（サメ）の一種を描いたNo 96 「さが」は一名「ふる」ともあり、水戸でサガ、羽州山形でサガボウという。魚類のNo 97 「かまひし」（カマツカ）は仙台でカマビシといい、No 101 「あを」は註書に「ちいさきを、いなどと言」とあるから（フリ）のことで、東北地方の呼称である。その他、No 105 「あふがひ」（ウグイ）は弘前と仙台、No 108 「かさき」（シロウオ）は相馬地方、No 111 「がさ」（メバル）は弘前に見えている。

【C群】 No 52 「ひらかむし」は水棲昆虫のようだが、『日方』は（ゲンゴロウ）を意味するヒラカムシを青森、南部、秋田、山形、福島に記している。

【D群】 No 45 「水黾虫」（ミズスマシ）は『物類称呼』に四国とするが、『啓蒙』は南部と仙台を加え、『日方』には上総、福島、長野、島根の記載がある。No 51 「雪降虫」（ワタムシ）は『日方』では岐阜県飛騨があり、ユキムシでなら青森、宮城でもいう。No 55 「つるめき」は「川あけす共云」の注記があり、尻に二筋の尾が描かれて（カゲロウ）類と思われるが、むしろ異名の方が注意される。トンボ類をアケズというのは東北地方が有名だからである。No 50

「さとうむし」(シヤクトリムシ)などの使用地が分かれれば、さらに事情は明らかになるろう。

### 【E群】

No 80 「おきの手」は(シマドジョウ)らしいが、不明である。

以上、「陸奥国産色絵図」にかんじていえば、隠岐や伊賀の絵図註書をふくむものの、書名が暗示するように東北地方各地のものを写している可能性が高いという程度にとどまる。

### 五 まとめ

以上の作業と調査により、「富山前田本草」と「陸奥国産色絵図」に収められた絵図註書が、各地に残っていた享保元文年間の産物絵図註書帳から転写されたものであること、および未知の国領のものをふくんでいる可能性が高いことを述べてきた。

想定される地域をいっそう狭めることができれば、逆にこれらを二百五十年以前の方言語彙資料として利用することが可能になるろう。その意味では、絵図を伴った方言資料として重要な地位を占めるかも知れない。

(本稿に用いた産物帳データは、平成四年度科学研究費補助金一般研究(C)および財団法人味の素食の文化センターによる食文化研究助成金によって作成したものである。)

### 注

- 1 上野益三『明治前日本生物学史 第一巻 新訂版』四三〇頁参照。
- 2 領主黒田斉清もまた博物学を好み、前田利保と親交が深かった。同前書、四三二頁参照。
- 3 『集成』解説が指摘するのは、福岡領十一種、岡山領十二種、肥後熊本領二十種、豊後熊本領四種、伊豆国九種

である。それぞれ見落としや誤りがあるから、本文中の数字で訂正しなければならない。

4 福岡領は西日本新聞社『筑前国産物絵図帳』（昭和五〇年）、岡山は岡山県郷土文化財団『備前国備中之国内領内産物絵図帳』（昭和六三年）という彩色復刻本がそれぞれ刊行されている。

5 『集成』にはNo198「ねばさし」（草類）が漏れ、逆にNo95「あいまい」を「あいまい草」として肥後国に数えているが、註書が一致しない。

6 二本の「産物註書」は一方が原案、他方が清書本であろうが、両書の関係は必ずしも明白ではない。清書本には元表紙裏に次の貼紙がある。

此絵図之扣者御国御奉行所江有之候。此方<sub>ニ</sub>者注書巻冊  
産物帳巻冊迄有之候。下帳等者江戸御奉行所江御留守居

沢村孫大夫<sub>ハ</sub>被調候事。

右絵図共二本書三冊者元文二巳年八月十五日、丹羽正伯老江

右孫大夫を以被指出候事。

熊本領関係の文書での確認はできていない。「富山前田本草」巻四末尾の「鹿草」註書（豊後熊本領）に続く識語（掲掲）によれば、右の記事も正しいのであろう。ただし、草類「からかふじ」に「からこうじと申ハ番椒の別名之由、追而申来ニ付而、此絵図除之候也」、貝類「うちほう」にも同趣旨のもの、草類「こぶし」には「こぶし清書にハにごり付不申候」と付紙があるから、完成本とは相違する点があるらしい。

いま一本は、註書の作成過程を教える貴重な資料である。全体は二百九十枚のから成り、一紙の表丁に註書案文を記し、貼紙による削除や訂正、一部を抹消して再訂、朱筆で補訂、ときには註書全体を朱筆で記した紙で差し替え、それを朱筆で再訂するといった具合に、何段階もの改訂がなされている。「四月五月」を「四五月」、註書末尾の「絵図之通御座候」の大部分を削除するなど、全体として短縮化の傾向が著しいがなお精査を要する。

特に問題となるのは、註書原案に六十例以上もある「一名<sub>ハ</sub>共申候」という異名注記が、貼紙により徹底して削

除されていることである。理由は不明だが、惜しまれる。

7 用語や表記による分類には不安を抱く向きもあるかも知れないが、公文書たる絵図註書（少なくとも作成を命じられた方ではそう理解していた）の清書は右筆の職分であり、厳密な書式と表記方針が貫かれていたらしい。実際に、例えばNo198「ねばさし」は「二三月之頃」という用語から肥後熊本領のものと判明し、No192「ごんずいの木」には伊豆国に特有の表記「形ち」があることを手掛かりにして『集成』の漏れを補うことができた。

8 『物類称呼』や『倭訓栞後編』は東国方言として「かまぎつてう」を挙げ、相模方言にはそれぞれ「かまきり」「かまぎす」を載せている。

表1 『富山前田本草』註書の類別表

No.	種	産物名	類別	No.	種	産物名	類別	No.	種	産物名	類別
1	草	のみのこし	伊豆	51	草	川はぎ	甲G	97	草	やりかたげ	乙d
2	々	さくらがは	筑前	52	木	阿弥陀草	甲G	98	藻	猫の尾	乙d
3	々	こんだいろ	乙d	53	木	谷女郎	甲G	99	々	ゑびのす	甲B
4	々	袖ふり草	肥後	54	草	きじくびりかつら	肥後	100	々	はゞ	乙a
5	穀	雪の下大豆	乙c	55	蔓	ゑぶこ	甲G	101	草	うきなぐさ	乙a
6	菜	ぬけ大こん	乙c	56	穀	ざるぼう大豆	乙c	102	々	するり	乙d
7	草	かちもんじ	甲H	57	菜	伊勢菜	乙c	103	藻	なおり	甲A
8	藻	蛇口	乙d	58	草	馬こやし	乙a	104	草	へりりり	乙d
9	蔓	びゞつる	乙d	59	蔓	とびかずら	筑前	105	藻	海松葉	乙d
10	蔓	ふのり葛	甲I	60	草	にがいも	筑前	106	草	高なぎ	乙d
11	草	からかさ草	肥後	61	々	まりこ	乙c	107	藻	しつくいな	乙d
12	々	かまつか	甲D	62	々	青しそ	乙c	108	々	とりで	乙a
13	穀	赤さい大豆	乙c	63	々	きんばく	肥後	109	菌	かちたけ	乙a
14	々	大青ばと大豆	乙c	64	蔓	かつね	甲F	110	々	わかい茸	甲E
15	草	ほぜのね	甲F	65	草	くわんぎそう	筑前	111	々	江口茸	甲E
16	瓜	つた瓜	乙c	66	々	きじな	乙a	112	々	柳もたし	乙c
17	草	へびす	乙c	67	々	六角草	甲D	々	々	かのかわ	
18	蔓	かかみかつら	肥後	68	々	ちもと	乙c	々	々	ますたけ	
19	草	ぎしばり	甲H	69	穀	青引大豆	乙c	113	々	むきたけ	乙c
20	々	まんちゃ	豊後	70	草	あに大豆	乙c	々	々	わかいたけ	
21	々	ちやぬから草	乙d	71	草	きたすぎ	甲D	草	々	ぎらん草	
22	穀	地もたず小豆	乙c	72	々	みづほこり	筑前	114	菌	たも木茸	甲E
23	々	ぶどう大豆	乙c	73	々	もやし草	肥後	115	々	かつほ茸	甲E
24	草	はなしのぶ	筑前	74	々	つらわれ草	甲G	116	草	むまこやし	甲F
25	々	はいの丸	甲G	75	々	うさぎのみみ	乙a	117	々	ゆきもち草	甲G
26	々	すいもじ	甲G	76	々	かにつなぎ	甲H	118	々	くしら	乙d
27	々	田烏子	甲F	77	草	雪筆	豊後	119	々	さつきかやし	乙d
28	蔓	牛かねかつら	肥後	78	草	むしなり草	筑前	120	々	こめ草	筑前
29	草	たまご草	肥後	79	々	そわ草	乙d	121	蔓	みやまつ	甲I
30	々	牛のひたい	乙d	80	々	たに草	乙d	122	草	うわぎな	甲F
31	々	たきな	乙a	81	々	さんほうで	甲G	123	藻	がらんも	肥後
32	々	こしき草	甲D	82	蔓	ふうとうかづら	伊豆	124	草	のびすま	甲G
33	々	へび草	伊豆	83	草	こもち草	肥後	125	々	きつら草	肥後
34	々	はまやごろう	筑前	84	草	いぐさ	乙c	126	々	ちうな	乙c
35	々	野もうせん	筑前	85	々	いしみ草	乙c	127	々	みず	
36	蔓	あいこ	乙a	86	々	がば	乙c	128	蔓	あまこ	乙c
37	々	ぜにかつら	肥後	87	々	ゑほしきく	乙c	129	蔓	ふめとうかつら	肥後
38	草	たつてこ	甲H	88	々	かうゑ	乙c	130	草	小ほぜの根	乙a
39	草	かれほこ	筑前	89	々	ほどめき草	肥後	131	々	ぼうらん	甲D
40	々	はとくびりかつら	肥後	90	々	男草	甲G	132	々	かまつか	甲F
41	々	ひろじ	甲G	91	々	ばいけいらん	筑前	133	々	こまかつら	肥後
42	々	くろがねかつら	筑前	92	穀	しどけ	乙c	134	々	山かぶ	甲E
43	々	むねがえくさ	乙a	93	穀	青はと大豆	乙c	135	蔓	しいざ	甲D
44	々	たちはこ	豊後	94	草	ここみ	乙c	136	蔓	シラクチカツラ	乙a
45	々	ちどり草	筑前	95	々	みつかど	乙a	137	草	がつほうじ	甲A
46	々	さつきほうし	乙d	96	々	ゑんみの根	乙a	138	草	はままつ	乙a
47	々	ゑのこほう	甲G	97	々	海すげ	乙d	139	々	山かしう	乙a
48	々	しりやす	甲G	98	々	やわら	乙d	140	々	ざるかしら	肥後
49	木	のぶ	甲D	99	々	あいない	甲H	141	々	ななふし	肥後
50	草	しのかや	甲G	100	々	びりしろ	甲G	142	々	とうと草	甲G

類纂本絵図註書帳の分類と典拠の推定

No.	種	産物名	類別	No.	種	産物名	類別	No.	種	産物名	類別
142	草	だんじり	乙d	191	木	山くだし	乙d	240	魚	きつ魚	乙a
143	〃	はたかり	乙a	192	〃	ごんずいの木	伊豆	241	〃	さんま	伊豆
144	〃	浜葉	伊豆	193	〃	いねび	乙d	242	〃	わたこ	乙b
145	〃	せんくつし	肥後	194	〃	うね廻り	乙d	243	〃	ごんずい	伊豆
146	〃	道いんど	甲I	195	〃	すじたわし	備前	244	〃	きじやめ	甲F
147	〃	すゝめのひさ	甲G	196	〃	けひの木	乙d	245	〃	ゑいらみ	乙d
148	〃	かにとり草	筑前	197	〃	かうかい	甲D	246	〃	のど黒	甲E
149	〃	さんひち	甲H	198	甲	ねばさし	肥後	247	〃	きはち	伊豆
150	〃	もみ草	甲G	199	木	させぶ	乙a	248	〃	かかみ魚	甲F
151	〃	よめのさら	甲D	200	〃	あさち	乙d	249	魚	べら	甲A
152	〃	鹿草	豊後	201	〃	はいろ	乙d	250	〃	なわくり	甲F
153	木	やうけなし	甲A	202	〃	谷桑	乙d	251	〃	みこふな	甲D
154	〃	浜ほう	備前	203	〃	どうねり	乙a	252	〃	がも	甲A
155	〃	雀をどろ	乙d	204	〃	うつなの木	乙d	253	虫	かみちよ	甲A
156	〃	かつで	乙d	205	〃	しやつちん	備前	254	魚	ひつかり	甲A
157	〃	とり木	甲I	206	〃	のぶの木	備前	255	〃	こめふく	甲E
158	〃	きんさら	乙d	207	〃	谷ぞうち	備前	256	〃	車輛	甲E
159	〃	むわだ	乙c	208	〃	あべの木	乙d	257	獣	あしか	甲A
160	〃	こんごうの木	乙c	209	〃	はぐいの木	甲I	258	魚	めじな	伊豆
161	〃	かすて	乙d	210	〃	あさとり	乙d	259	〃	ひら	甲F
162	蔓	夏かそら	乙d	211	〃	本数	乙d	260	〃	ごいしさめ	甲A
163	木	くい	甲H	212	〃	馬目木	乙a	261	〃	かたさし	甲B
164	〃	まめふし	乙d	213	〃	ばたこ	備前	262	〃	ばけら	乙a
165	〃	さんす	乙a	214	蔓	かづらなの木	乙a	263	〃	からこぎ	甲C
166	〃	山柳	甲I	215	魚	はつ	乙a	264	〃	ぬりかけ	甲A
167	草	こもちくさ	乙a	216	〃	黒ぼこ	甲C	265	〃	うごろし	甲C
168	木	ついいい	乙d	217	〃	つばくら魚	甲F	266	〃	太郎作	甲C
169	〃	つちの木	備前	218	〃	かきの衣さめ	甲A	267	〃	海ます	甲B
170	〃	うら白	備前	219	〃	ばいほご	甲B	268	〃	あまぎ	甲C
171	〃	ぐいび	甲D	220	〃	さいれ	甲B	269	〃	くゑ	乙a
172	〃	ひるかるる	乙d	221	〃	そち	乙a	270	〃	口くろ	甲D
173	〃	水たも木	甲I	222	〃	とうやく	甲A	271	〃	さかとうじ	乙a
174	果	温州橘	備前	223	〃	ぎざみ	乙a	272	〃	鯛のした	甲C
175	木	ねづみ木	甲D	224	〃	ひらまさ	甲B	273	〃	あかぎ	甲A
176	〃	かつち	備前	225	〃	かまいいるか	甲A	274	〃	のこぎり	甲A
177	〃	河原かしわ	甲G	226	〃	がも	伊豆	275	〃	ひげ魚	甲A
178	〃	猿すべり	備前	227	〃	かねたたき	甲A	276	〃	ひらがしらさめ	甲A
179	〃	このみの木	甲E	228	〃	かのこさめ	甲A	277	〃	さゝいくだき	甲A
180	〃	葉の木	乙d	229	〃	なめらふく	甲E	278	〃	いだ	甲F
181	〃	青せき	乙d	230	〃	赤ばら	乙c	279	〃	あかさこ	甲C
182	〃	いわとり	乙d	231	〃	砂はみ	甲B	280	〃	嵯峨次郎	甲C
183	〃	しほじ	乙c	232	〃	石かぶり	甲B	281	〃	くろはぎ	甲B
184	〃	そねの木	乙c	233	〃	もふし	甲C	282	〃	すきざき	甲C
185	木	さない木	乙d	234	〃	石がندوق	乙b				
186	〃	たんば	備前	235	〃	こみうを	甲C				
187	〃	いねび	備前	236	〃	よどろ	甲B				
188	〃	ふじき	備前	237	〃	ほう長	甲E				
189	〃	とうめうの木	備前	238	〃	まゝかり	甲D				
190	〃	さるとりくゑ	備前	239	〃	ひちぬ	甲D				
						くまびき	乙a				



表2 『陸奥国産絵図』絵図註書の類別表

No.	種	産物名	類別	No.	種	産物名	類別	No.	種	産物名	類別
1	草	とうとうから	A	44	虫	あら虫	C	87	魚	ほつかう	隠岐
2	々	きもと	A	45	々	水甕<シロカキ>虫	D	88	々	くろあい	隠岐
3	木	田植ぐみの花	伊賀	46	々	かうずむし	C	89	々	ひしや	隠岐
4	々	田刈ぐみの実	伊賀	47	々	はつたぎ	B	90	々	あなから	隠岐
5	草	ごよみの花	伊賀	48	々	芝虫	D	91	々	つゝり	隠岐
6	々	ごよみの花	伊賀	49	々	がわむし	D	92	々	わかみつ	隠岐
7	木	桶すへの花	伊賀	50	々	さとうむし	D	93	々	しほこ	隠岐
8	々	桶すへの実	伊賀	51	々	雪降<ユキフリ>虫	D	94	々	れんてん	B
9	々	夏はせの花	伊賀	52	々	ひらかむし	C	95	々	かすべ	B
10	々	なつはせの実	伊賀	53	々	かわはむし	C	96	々	さが	B
11	虫	むご蜂	伊賀	54	々	目つぶし	D	97	々	かまひし	B
12	々	こわむし	伊賀	55	々	つるめき	D	98	々	せい	B
13	々	赤むし	A	56	々	虫<ウリバイ>	C	99	々	くろがら	B
14	々	こめ蜂	伊賀	57	々	からし虫	隠岐	100	々	沖ひらめ	B
15	々	粽むし	伊賀	58	々	せんとく虫	隠岐	101	々	あを	B
16	々	こぬかむし	A	59	々	ひの虫	隠岐	102	々	より	B
17	々	くちぶと	A	60	々	ほじ	隠岐	103	々	ざるたらふ	B
18	々	いなご	A	61	魚	ねんふつこ	隠岐	104	々	渡父魚<カチカ>	B
19	々	さやむし	A	62	鳥	かこもり	隠岐	105	々	あふがひ	B
20	々	はつこうむし	A	63	々	みと鷺	伊賀	106	々	ふせり	C
21	々	しをからむし	A	64	々	あつ鳥	伊賀	107	々	ごまかた	C
22	々	よどむし	A	65	々	たかかしら	B	108	々	かさき	B
23	々	おほ虫	伊賀	66	々	はしなが	C	109	々	ぎんぎょう	B
24	々	さざむし	A	67	々	とうねご	C	110	々	はとうを	C
25	々	ほこ	A	68	々	大むく	B	111	々	がさ	B
26	々	馬ひへる	A	69	々	にちりん	B	112	々	海たなこ	B
27	々	かいるばさみ	伊賀	70	々	鶴	B	113	々	川たなご	B
28	々	ごまむし	A	71	々	鶺鴒	B	114	貝	がんじやくり	F
29	々	ごとむし	A	72	々	黒鳥	B	115	々	いたほ	F
30	々	はだかむし	A	73	々	あふぶ	C	116	魚	かよなぎ	A
31	々	ひいる	A	74	々	にりやう	B	117	貝	いそり貝	C
32	々	赤子	伊賀	75	獸	貂<テン>	D	118	々	蛸	B
33	々	じんどう	伊賀	76	魚	すつほう	隠岐	119	々	ほつき	B
34	々	ふゆう	伊賀	77	々	べこ	隠岐	120	々	ほつかい	B
35	々	めくらこじ	伊賀	78	々	ましら	隠岐	121	々	あわ貝	A
36	々	さし虫	A	79	々	黒ごず	隠岐	122	々	ちしや貝	B
37	々	やすじ	B	80	々	おきの手	E	123	々	ちゝみうに	伊賀
38	々	蜘蛛	B	81	々	骨頭魚<コトチ>	隠岐	124	々	わたうに	伊賀
39	々	べいこ虫	B	82	々	嵐吻<シヤチホコ>	隠岐	125	々	木うに	伊賀
40	々	かうらむし	B	83	々	うきす蕨	伊賀	126	々	うに	伊賀
41	々	かぶ虫	B	84	々	月の輪	隠岐	127	菌	みる茸	隠岐
42	々	どろむし	C	85	々	とひさめ	隠岐	128	藻	めほそ	隠岐
43	々	田むかて	C	86	々	いかけ	隠岐	129	々	かじじじ	隠岐

類纂本絵図註書帳の分類と典拠の推定